「いってきます。」と毎朝玄関を出て、空き家だらけの細い道を約二百メートル歩く。空き家のかべには「売り家」と書かれた紙が一年以上、貼られているし、庭は雑草だらけで、草たけは私の身長を超えている。友達には一人も会わない。というより、人がいない。時々、猫が走っている。交差点まで来て、横断歩道を渡ると廃校になった小学校が見える。その小学校前の、バス停からバスに乗り込み、となり町にある小学校にたどり着く。これが私の通学路だ。

広島県呉市にある私が通う広南小学校は、全校児童九十七名で全学年一クラスしかない。今年、入学する一年生が八名だと聞いた時はさすがに残念な気持ちになったが、学校中のみんなが、家族のように仲が良い。

母も祖母も、この町で生まれ育ち、廃校になった小学校の卒業生だ。母が小学生の頃は各学年二クラスあり、新しい家が次々と建ち、スーパーや、クリーニング、文房具などの、

店がたくさん並ぶ活気ある町だったようだ。しかし今は、家の周りを見渡しても、ほとんどが空き家で、店は閉店して駐車場になった。母は食材を買うために、車を運転して遠くのスーパーまで行くしかない。車を運転しない祖母は、宅配サービスを利用する。まさに、「買い物難民」だ。

この町が活気ある時代を過ごした母は、音楽大学を卒業して、ピアノの先生になった。私が赤ちゃんの頃、周りの大人から、「兄弟を作ってあげないの？一人っ子はさびしいよ。」と、よく言われたそうだが、料理や洗たく、家のそうじに加えて、ピアノコンサートの仕事で、いそがしい日々を過ごしているうちに「一人の子供だけを大切に育てよう」と自然に思うようになったそうだ。その言葉通り、私は、家族から大切に育ててもらっていると思うし、三人暮らしに満足している。

しかし私が五才の時、西日本ごう雨災害で

広島県呉市は大きな被害を受けた。その日、両親は広島市で仕事をしていたので、呉市まで帰ることができず、祖父母の家に預けられていた私とは、しばらく会うことが、できなかった。さらに、近くの山の土砂がくずれ、道路が通行止めになった。その上、断水が、何日も続き、自衛隊の人達が「災害派遣」と書かれた車に乗って、廃校になった小学校の広場に、水を何度も届けに来てくれたことをよく覚えている。災害は、いつ起こるか分からないことを体験したので、学校や地域の、防災訓練は、積極的に参加しているし、日頃から防災について考えるようになった。

そして、今起こっている世界的な災害は、コロナだと思う。今年の夏、沖縄に住む百一才の曽祖母がコロナに感染した。

「百一才のおばあちゃんにだけは、コロナに感染させてはいけない。」

と、家族みんなで言いながら、感染対策を、頑張っていたが、それでも感染した。体力が

弱りながらも曽祖母は、
「家が楽しい。ずっと家にいたい。」
と強く希望していたので、自宅で訪問医りょうを受け、家族が看病して、大好きな自宅で家族に見守られながら、十月にたくなった。
「愛ちゃんが医者になる百十五才まで元気に頑張るよ。」
と、口ぐせのようにいつも言い、私の勉強を応援してくれていたのでとても悲しかった。
今年の六月に全統小で、決勝進出が決まったことを、私が電話で伝えると、
「ちむどんどんするー！」
と沖縄弁で言って、大喜びしてくれたことが最後の思い出となった。
このように私の身の回りを見渡すだけで、過疎化、空き家問題、買い物難民、女性の社会進出による少子化、自然災害、高齢化社会など、答えの出ていない問題が山積みだと感じる。しかし過疎化で不便な町でも母や祖母のように、生まれ育った町に愛着を持って、

一生、住み続けようとしている大人もいる。

私は将来、医者になりたいと思っているので、医りょうの分野で、過疎化が進む町を、助けていきたい。毎日、新聞をしっかり読み今の世の中で、どのような問題が起こっているのか知る努力をしたい。便利な都会よりも田舎で暮らすことを選ぶ人もいる。病院に行くことができない人もいる。私の曽祖母のように、住み慣れた自宅で、家族に見守られながら、長い人生を終えたいと思う人もいる。そのような人達の力になれるように私は訪問医りょうをしてみたい。そのために、様々な状況の人の気持ちを理解して、歩み寄り、心の通う診察ができる医者を目指したいと思っている。

世の中の不便さをなげくのではなく、そこに目を向けて、希望の光を見出していきたい。私は誇りを持って、明日も、となり町の小学校へ登校する。

「いってきます。」